雄牛の明るい未来を目指して

神奈川県立中央農業高等学校　畜産科学科　２年　中井　湧心

「えー!最悪!」子牛が無事に生まれたのに、なんで先輩たちはそんなにショックを受けているんだろう?この元気な子牛と3年間一緒に過ごせると思っていた当時の私には、先輩たちの気持ちがわかりませんでした。

中央農業高校畜産科学科に入学し、家畜の生理生態や飼養管理を中心に学びながら酪農部で活動していた1年生のとき、それまで牛とは無縁な生活を送っていた私は人生で初めて牛の分娩を見届けました。無事に産まれたのはジャージー種の雄。産まれた瞬間は緊張が安心にかわり、とても感動したのを今でも鮮明に覚えています。生まれて数日後、元気に走り回りミルクをいっぱい飲んでいる姿を見て酪農の楽しさ、命の誕生の喜ばしさを初めて体感しました。しかし、先輩たちの反応は私が想像していたものとは違いました。先生に聞くと学校には置いておけないこと、そしてその理由とともに教わりました。 牛乳を生産することができる牛はすべて雌です。乳用種の雄は大人になっても乳は出ませんし、乳用種の特性上、飼料から摂取した栄養は乳へと送られるよう品種改良されてきたため、体に脂肪があまりつきません。そのため赤ちゃんを生むことも、乳を出すことも、美味しいお肉になることもできない雄は、飼料費が高騰する今、経済的な価値はゼロどころか、マイナスになってしまいます。特にブラウンスイス種やジャージー種は肥育するにもホルスタイン種よりも増体が悪く、飼料費高騰も相まって最終的にはかなりの赤字になってしまうため、皆引き取りたがらないといいます。 せっかく生まれた命なのに、その誕生を喜んでくれる人はほとんどいません。また、それらの雄牛は値段がつかないため、すぐに安楽死させられてしまうこともあるそうです。母牛が10ヶ月間お腹の中で育て、無事産まれてきてくれたというのに、残念がられている姿を見てショックを受けたと同時にとても悲しくなりました。分娩から3週間後、子牛は無償で引き取ってくれる農家さんのもとへ出荷されました。

この件をきっかけに、私は改めて家畜の命のあり方について考えてみました。家畜といえど大切な命です。その命を人間が勝手に「価値のない命」と決めつけて、生まれて間もない幼き命を軽蔑視している現状に不満を感じ、この状況をどうにか変えることはできないのか。人間の都合によって、人に命を繋ぐことのできない命を少しでも減らすことができないだろうかと考えるようになりました。近年判別精液を用いた人工授精法がかなり普及し、生まれてくる雄の数は減りましたが、100%ではありません。雄が生まれてこなければと考えましたが、防ぎきることは難しいと知り、行き詰ったような感覚になりました。

そんなとき、ネットニュースで乗牛をしている牧場の記事をみました。人を乗せて牛がゆうゆうと歩いている姿に驚きましたが、体験したお客さん達はみんな笑顔でした。人も牛も生き生きしていてとても楽しそう。私も牛に乗ってみたい!その時ひらめきました。乗牛に育てれば、雄でも価値が生まれると。価値が生まれれば喜ぶ人が増え、そして体験を通してたくさんの人に現状

を知ってもらうきっかけにもなる。雄が産まれてもみんなが喜ぶ未来に近づけるのではないかと考えました。

そんなことを考えていた12月にブラウンスイス種のコロロの分娩がありました。女の子だったらお母さんに関連付けてケロロという名前にしよう!と話していましたが、生まれてきたのは雄でした。名前は濁点をつけてゲロロ。前回の分娩と同じようにみんなは悲しんでいました。ゲロロもすぐ出荷される予定でしたが、引き取ってくださる農家が見つからず、学校で肉用として飼育することが決まりました。これはむしろいい機会だと考えた私は、人を乗せることができる牛として育て、本校で月に1回行っている酪農教育ファームで乗牛体験を実施することを計画しました!しかしゲロロはまだ人を乗せられる大きさではありません。そのためまずはお客さんがどれくらい乗牛に興味があるか知るために酪農教育ファームに来てくださった方にアンケートを取りました。結果は参加者全員から乗りたいという嬉しい意見をいただきましたが、反対に実際に乗る際のイメージが湧かない、牛が暴れて落ちたりしないか心配、牛との接し方が分からず仲良くなれるか不安という意見も上がりました。それらの意見を元に安心して乗牛体験を行なってもらえるように現在は週に数回程引き運動を行ったり、ホイッスルを使用し、意思疎通ができるようにするための調教をし信頼関係を築いています。また背中におもりを乗せて歩かせたりリヤカーを引かせたりして物を乗せている状態で歩くこと、引っ張ることに慣らしています。そして様子を見ながら乗る練習をして、今年度の教育ファームで乗牛デビュー予定です!

また、たくさんの人に乳牛の雄について、そしてこの取り組みを知ってもらうために本校の生徒を対象とした発表会でのスピーチや、校内外のイベントを通して啓発活動を行っています。本校の酪農教育ファームではふれあい体験として実際にゲロロと触れ合い、調教の様子を見てもらったりクイズを通して乳牛の雄について知ってもらう講義を行いました。また6月1日に神奈川県平塚市の花菜ガーデンで行われた、牛乳消費を促す「牛乳の日イベント」の場では、搾乳体験やクイズなどを通して乳用種の雄の現状やこの取り組みについての紹介を行いました。これらの説明にはイラストや写真、アニメーションなどを活用したパネルやスライド等を作り、子供でもわかるような説明を行うことにより、この問題をよりたくさんの人に実感していただくことができました。実際に来てくださった方から「今まで乳の出ない雄牛のことなんて気にしたことがなかったが、今回話を聞いてどうしたら動物たちが幸せに過ごせるか初めて考えさせられました。」「こういった問題に高校生が真摯に向き合っている姿に希望を感じました。」といった嬉しいお言葉をいただきました。これらの活動を通して牛に興味を持ってもらったり、癒やしの存在としてより身近な動物になってもらうこと、そして少しでも雄の現状を酪農とは関係ない生活を送っている人達に知ってもらうことが大事だと考えています。

今後も11月に行われる文化祭や酪農教育ファームの場で引き続き啓発活動を行いつつ、生徒やお客さん、牛が安全に乗牛体験できるよう、安全対策やゲロロへの負担を軽減するなどのたくさんの課題をともに乗り越えて取り組んでいきます!今は小さな取り組みですが、いつかこの取り組みをもっと沢山の人に知ってもらい、酪農に興味を持ってもらい、この現状について個人がで

きることは何か考えてもらうこと、そして牛がもっと身近な動物になり、消費者の意識を変えていくことが大切だと考えています。

私の夢は人間の都合で人に命を繋ぐことのできない命を少しでも減らすことです。この夢を叶えるために、まずは乗牛体験成功を目標に啓発活動の継続や日々の練習に取り組んでいきたいと思います。雄牛でも幸せになれる明るい未来をめざして。